

若者の町と呼ばれている吉祥寺の賑わいは想像していた以上のものだった。

平日の昼下がりでだというのに、駅から絶えまなく人の波があふれ出し、栄子を取り囲んでは急ぎ足で追い抜いていく。春を飛び越えてもう初夏の装いの若者たちや、ショーウィンドーの華やかな飾りつけに目を奪われてなかなか足が前に進まなかった。

商店街を通り抜けて五日市街道を渡ってすぐのところにあかつき荘はあった。玄關まわりがきれいに掃き清められ、打ち水の後が春の陽射しを受けてキラキラと輝いていた。かなり古い建物だと聞いていたが、表から見る限りではそれほど

ど気にならない。

源造の話では、一階の二部屋をぶち抜いて管理人室兼住居を用意するということだった。

そのために今一階に住人を入れていない。通りに人の姿がないのを確かめてから、栄子は素早く建物の中に入り一番手前の部屋に忍び込んだ。ドアを開けたところが三畳ほどのキッチンになっっていて、廊下に向かって流し台とガスコンロが並んでいる。その奥の六畳の部屋は右側が押し入れで、左が壁。南に向かった正面に大きな目の窓がある。カーテンのない窓から西日がまともに差し込んで、殺風景な部屋を白っぽく浮かび上がらせている。

窓を開けると、手を伸ばせば届きそうなところに隣の建物が見える。右を向いても左を見ても、目に入るのは灰色のコンクリートの壁だけだった。隣の部屋もこのこと大差あるはずがない。

思ったよりはるかに狭い部屋だった。この部屋を二つ合わせただけが栄子と直哉に与えられるスペースであり、コンクリートの壁肌だけが窓からの景色になる。

吉祥寺の街を歩いたときの弾んだ気持ちだが、一瞬のうちに重苦しいものに変わっていった。五歳になったばかりの直哉のことを一番に思った。郊外にある今のマンションの周りには野原や小川があつて、直哉の格好の遊び場になつてい

る。同じ年頃の子供たちと時間を忘れて遊んでいく。その直哉をこのコンクリートジャングルに閉じ込めてしまうことに戸惑いがあった。直哉だけではない。栄子自身もこの部屋で長い一日を過ごすことに耐えられるかどうかも分からない。見知らぬ土地で寂しく暮らすのなら、守との思い出が相手をしてくれる今のマンションにいたほうが救われる。

栄子は重い心を抱いたまま、あかつき荘を出た。友人に預けてきた直哉のことが気にかかったが、このまま帰る気にもならず、思い切つて源造を訪ねてみることにした。

源造の家は吉祥寺の外れの高級マンションが立ち並ぶ一角にあつて、がっしりとした石の門が一際目立つ建物である。この門をくぐると、深い緑が生い茂った奥に広大な屋敷の姿が現れる。その姿を見ていつも一瞬足を竦ませてしまうのは、屋敷の広大さが源造の財力と重なって栄子を圧倒するからだつた。

突然訪れた栄子を、源造は驚きもせずを迎え入れた。

「どうだつた、あかつき荘は。見てきたのだろう」

「はい、今その帰りなんです」

鬼の実業家として恐れられている源造も、和服でくつろいでいる姿にその面影はない。栄子の

こへ連れてくればいいわ。庭もあるし、池に鯉もいるし、退屈しないわよ。私も直哉君と遊べて嬉しいわ」

お茶の用意をしていた芙美が手を止め、物静かな伯母にしては珍しくはしゃいだ声を出した。

住居のことも直哉のことも、源造の口振りでは問題がなさそうだつた。

栄子はふつと肩の力を抜いた。

「管理人の仕事だつて簡単だ。月末に家賃といつしよに各部屋で使った公共料金を集金するこ

とど、電話の取り継ぎだけだ。最近では各部屋に電話があるから、その必要もほとんどないけどね」

栄子が次に気になっていたことも、源造は先回

前では、常に優しく穏やかな伯父であつた。伯母の芙美とも挨拶を交わした後で、栄子はあかつき荘を見てきた感想を正直に打ち明けた。

「栄子がそう思うのだったら、好きなように改築していいんだよ。どうせ一階に人を入れるつもりはないから、何部屋使つたつて構わない」

源造は何だそんなことかと言うように軽い調子で言つた。

「直哉のことも心配ない。近くに武蔵野八幡神社があつて、境内が小さな公園になつている。子供がいつも集まつているし、その隣は幼稚園だ。頼めばすぐにでも入れてもらえるよ」

「それに、栄子さんが出かけるときは直哉君をこりして説明してくれた。

「それじゃ、一日中部屋にいらなくても構わないんですね」

「そうだよ。普通の生活をしていればいいんだよ。管理人がいるというだけで住人の心構えが違つてくるんだ。ようするに、管理人という名目であかつき荘に住んでくれればいいんだよ」

もう一度よく考えてから返事をしますといい残して席を立つた栄子を、源造と芙美は玄関まで見送つた。そして、しみじみとした口調で言つた。

「今のままではいけないよ。守もあの世で心配しているに違いない。直哉のためにもしつかりしなくては」

「私たち、二人だけの暮らしでしょう。栄子さんが近くに住んでくれれば、こんなに頼もしくて嬉しいことはないわ」

二人の言葉に深々と頭を下げて別れを告げた。

吉祥寺の町はずでに夕暮れの中にあつた。

栄子は再びあかつき荘の前に立ち、夕焼けに染まる建物を眺めた。屋根の瓦がオレンジ色の光の中でキラリと輝いて見える。隣のビルがただ眩しいだけの尖つた光を放っているのに比べて、どこか吸い込まれるような暖かさをもった光だつた。

源造が最後に言った言葉と夕暮れに建つあか

りを通り過ぎていく。眩しいほどの照明の下で、吉祥寺はますます華やかに活気づいてきている。栄子は大きく胸を張って歩き出した。すぐにでも改装に取りかかりそうな源造の口振りだつた。一ヶ月もすればあかつき荘に引越すことになるだろう。

この春は忙しくなりそうだった。

3

思い切つた改装工事が手間どつて、栄子があかつき荘に引越してきたのは六月になつてからだつた。

一週間という日があつというまに過ぎ、よう

つき荘の姿が、栄子の胸をせつなく締めつける。確かに今のままではいけない。守の残してくれた保険金でたちまちの暮らしはどうにかなるが、直哉の将来を考えるとそののんびりともしてられない。といつて、直哉を置いて勤めに出ることもできなかった。

そう思うと、管理人という仕事は今の自分に一番ふさわしい仕事である。思い切つて新しい環境に飛び込むことが、自分たち親子を立ち直らせる原動力になるかもしれない。

誰かがぶつかったような気がして、栄子は我に返つた。

見渡すと、人の波が何重にもなつて栄子の周

やく部屋の中が片付いたところである。

栄子は朝日を浴びながら玄関まわりを掃除していた。二階の廊下とトイレは二階の住人たちの当番制になっている。独身男性は掃除用品やトイレットペーパーの費用をすべて負担する代わりに掃除当番は免除。長く住んでいる住人同士でうまくやっているようだ。

一階の玄関と廊下、二階へ続く階段が栄子の掃除区域である。それと週に二度のゴミ収集日にポリバケツに入っているゴミをまとめて収集場所に持つていくこと。生ゴミと普通のゴミがきちんと区別してあるのでそうたいした仕事ではなかった。

あかつき荘の玄関は、格子の二枚の大きな引き戸がある三畳ほどの三和土で、両脇に木製の下駄箱と郵便受けが部屋の数だけ並んでいる。「土足厳禁」と書かれた張り紙がこの建物の年代を感じさせている。

玄関の前と三和土をほうきで掃いた後、引き戸や下駄箱を水拭きする。キュッキュツと音がするほど力を入れて拭いていくと、木目が鮮やかに浮かび上がって光沢が出てくる。

よほどしつかりと建てられているらしく、まだどこも傷んでいない。源造のあかつき荘に対する気持ちを知った今、そのことが自分のことのように嬉しかった。

源造からあかつき荘を建てたときのいきさつを聞いたのは、改築に関しての打合せをしていたときだった。源造が引越し祝いにシステムキッチンを贈ろうと言いつ出した。

「こんな改築にお金をかけてもらった上に高価なプレゼントをいただけるなんて夢みたいですよ。でも、もったいなくありませんか。いずれはあかつき荘も壊すことになるでしょうから」

栄子が申し訳なきように言ったとき、源造の表情が変わった。

「何を言うのだ。あかつき荘を壊すつもりはない。いつまでも残しておくつもりだ。だからこそまだ若い栄子に管理を任せるんじゃないか」

(以上11月4日放送分)

激しい口調だった。栄子は思わずその場に立ち上がってしまった。隣の部屋にいた芙美と直哉が驚いて駆けつけてきた。

源造はしばらく栄子の顔をにらみつけていたが、間もなく平静さを取り戻した。

「大きな声を出して悪かった。栄子はあかつき荘のことを何も知らないんだ。いい機会だから聞かせておこう」

芙美にお茶の用意を言いつけると、今度は声を和らげて話し出した。

それは、栄子が生まれる前の古い話であり、源造があかつき荘をいつまでも残しておきたい理由につながる思い出話だった。